


令和4年度 第3回考古学講座

～圏央道の調査で発掘された旧石器時代～

 公益財団法人かながわ考古学財団
栗原伸好



日 時：令和4年9月10日（土） 14:00～16:00
会 場：会場：かながわ県民センター 2F ホール

～ 目 次 ～

はじめに

1. 考古学の基礎知識
2. 旧石器時代とは
3. 石器の観察方法とそこから見えてくるもの
4. 旧石器時代の生活の変遷
5. 圏央道の建設により発見された主な旧石器時代遺跡

おわりに

はじめに

圏央道とは、首都圏中央自動車道路の略称です。その中でも神奈川県エリアのこの道路を「さがみ縦貫道路」と呼んでいます。茅ヶ崎から北上し、高尾山の手前、東京都と都県境までの約34kmの区間です。今回のお話は、このさがみ縦貫道路から発見された旧石器時代遺跡を対象としています。

さがみ縦貫道路の建設に伴い実施された遺跡の調査は4市1町で、計22遺跡を数えます。このうち、旧石器時代の石器群が発見されたのは、相模原市（旧城山町エリアを含む）を中心とした5遺跡です。

ここでは、この5遺跡の中から、特に注目される石器群を紹介していきます。数は少ないですが、石器群ごとに色々な特徴が観察されました。

それでは、土器がまだ発明されていない旧石器時代の人々の世界をお楽しみ下さい。

1. 考古学の基礎知識

①考古学とは何か

「つまり、ほかの歴史家とまったく同じように、考古学研究者の任務は、時代と社会環境の産物であるわれわれ人類、そのわれわれの住む人類社会の形成過程を調査し復元することにある」(V・G・チャイルド, 1956)

②考古学で取り扱う資料

遺物：人為的に作成された道具（土器・石器・鉄器…など）

遺構：台地に掘りくぼめられた人為的な痕跡

（住居跡・落とし穴・溝…など）

③考古学上の時間の概念

絶対年代：あるモノに関する実年代のこと。

（例）製作された年代が分かる：お金・墓石・木簡・絵画…

相対年代：複数のモノ同士を比較し、どちらの方が「新しい」、または、「古い」というように、複数のモノ同士の間に存在する新旧の時間的な位置付けのこと。

（例）私が高校生の頃に遊園地で買ったぬいぐるみと、私が子どもに買ったぬいぐるみは、後者の方が新しい。

型式の組列：私たちは、生活をしていくために様々な道具を発明し、それを少しずつ改良しながら使っています。お鍋やお茶碗もその1つです。これらの道具をよく見てみると、時代やその道具が作られた地域により様々な特徴を持っていることはよく知られています。

このように、1つの道具を見た場合、その道具の特徴が時間的・空間的に一定のまとまりを持っている場合、これを「型式」と呼びます。この「型式」も良く見ると、少しずつ形態や模様が変化していることが分かります。この変化を捉え、道具の推移を予測し、並べていくことを「型式の組列」と言います。これは、文字資料の出土が極めて少ない考古学の世界では、とても重要な考え方です。



1973年



1980年



1984年



1987年



1993年



1995年



2000年

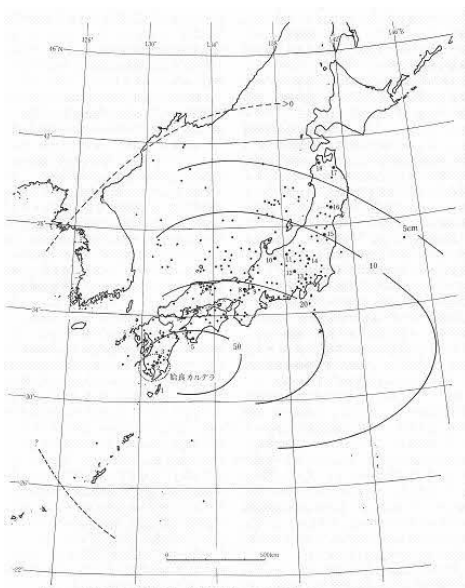
第1図 車の形態の変遷

④火山灰と層位について

広域火山灰：日本列島は、世界でも有数の火山大国です。火山の噴火によって、噴出された火山灰が風に運ばれ日本列島を厚く覆い、やがて土壌が形成されました。

旧石器時代は、現在よりも火山活動が活発で、時には極めて広い範囲を覆ってしまう大爆発も起こっていました。このように、その火山周辺だけでなく、広域な範囲で列島を覆う火山灰を「広域火山灰」といいます。代表的なものは、約 30,000 年前に噴火した鹿児島県錦江湾付近にある始良山の火山灰です。これは、九州・四国のみでなく、本州を広く覆うほどの大噴火で、青森県でもその火山灰の降灰が確認されています。

層位の重要性：上記のように長い間の火山活動により降り積もった火山灰は、実は後世の我々にも大きな役割を示してくれています。神奈川県は、富士・箱根といった火山が近くにあるため、他の地域に比べ、層位の堆積がとても厚いのが 1 つの特徴です。このため、古い時代の調査をするには、他の地域に比べて大変ですが、時期ごとに比較的土層が区分されているという傾向があります。つまり、何層にも重なった土の層（層位）が自然の物差しの役割りを果たしています。



第 2 図 始良 Tn 火山灰の検出範囲
(町田・新井 1992『火山灰アトラス-日本列島とその周辺-』東京大学出版より転載)



第 3 図 早川天神森遺跡の土層堆積状況

2. 旧石器時代とは

- ①旧石器時代：今からおよそ 16,000 以上前、まだ土器が発明されておらず、狩猟・採集を中心に生活を営んでいた時代と考えられます。安定的な定住生活はまだ行われていたとは考えにくく、移動を繰り返した生活を行っていたものと考えられます。我々ホモ・サピエンスは、約 10 数万年前にアフリカで誕生し、日本列島にはおよそ 4 万年前に辿り着いたと考えられています。



第4図 現生人類の拡散

(堤隆 2011『列島の考古学 旧石器時代』河出書房新社より転載)

- ②当時の環境：旧石器時代は、氷期に当たるため、現在よりも気温が4～6度低く、海面も今より100mほど低下していたと考えられます。よって、大陸から渡って来たと考えられる大型動物が生息していた痕跡も確認されています。

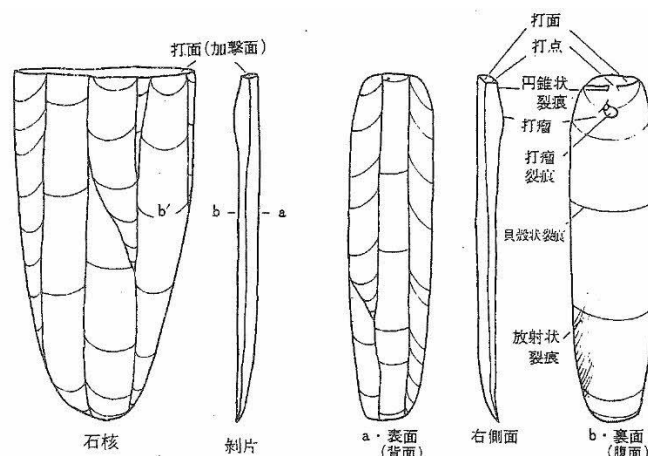


第5図 旧石器時代の海岸線（左）と大形動物とその広がり（右）
(岩宿博物館 2008『岩宿人の暮らしをさぐる学習ノート』より転載)

3. 石器の観察方法とそこから見えてくるもの

①石器観察のルール：遺跡の報告書を見ると、石器には色々な線が描かれています。その石器を手にとって比べてみることでできれば、その線の意味も理解できるかもしれませんが、残念ながらそういう機会はめったにありません。報告書に掲載されている図は、いわゆる「絵」ではなく、「実測図」と呼ばれるもので、あるルールに基づき、石器を表現したものなのです。

実測図は正確に形を写し取り、石器が作られた際に生じた痕跡を表現しています。このルールが分かれば、皆さんも実測図からその石器がどのように作られたのかということを理解することができるのです。



第6図 石器実測図の表現方法 (加藤晋平・鶴丸俊明 1980 『図録石器の基礎知識 I -先土器 (上)』 柏書房より転載)

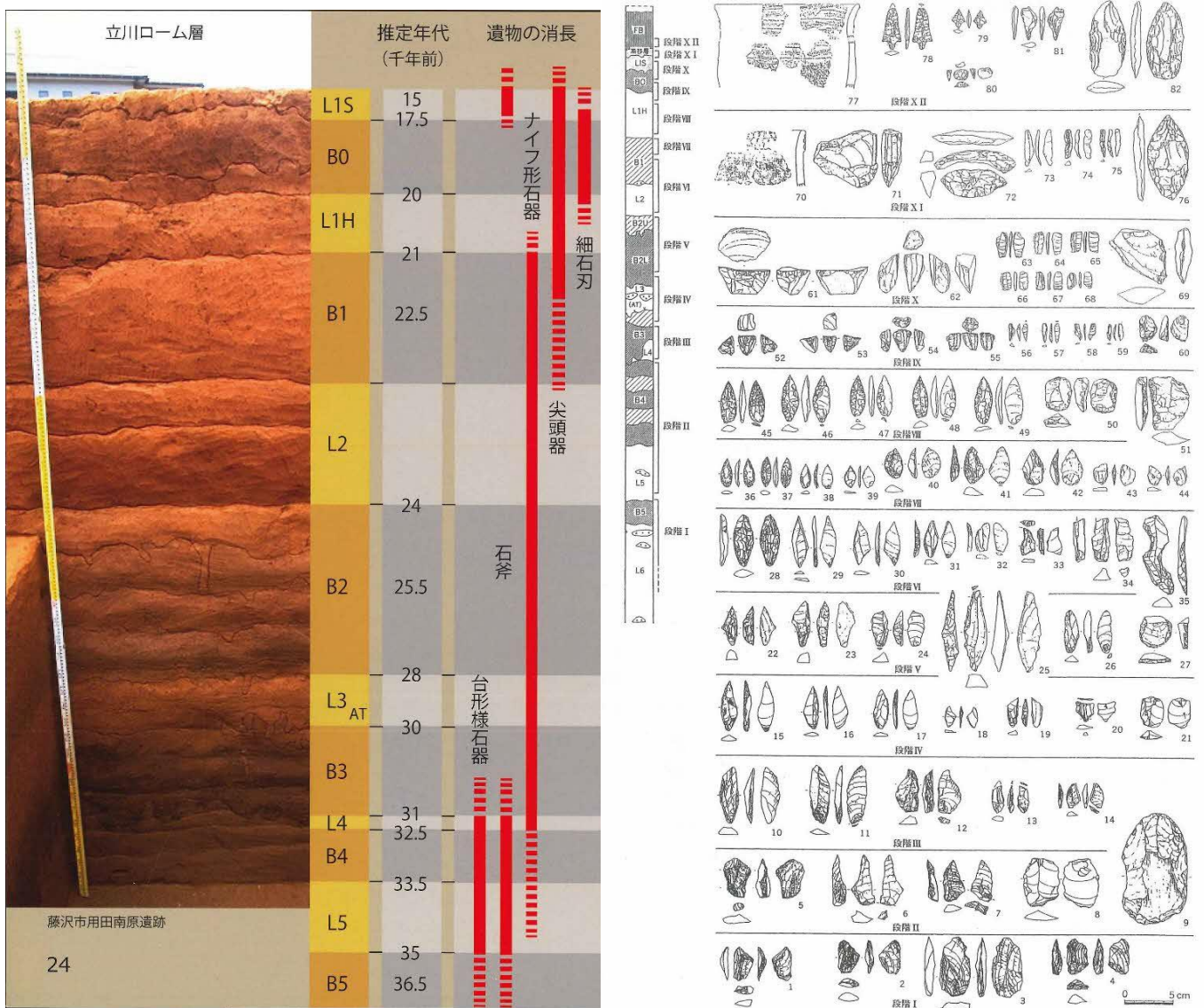
②実測図の観察からわかること

第6図を観察すると、石器全体に上向きの半円状の線がいくつも見えます。一番右側の「裏面」とされたの図の中に「貝殻状裂痕」(以下「リング」とします)と表現されている線です。また、裏面の左下には「放射状裂痕」(以下「フィッシャー」とします)とも書かれています。実は、この2つの線が石器を観察する上では極めて重要です。

水溜りに石を投げると、波紋が広がります。実は石器も石に力を加えたところから同心円状の輪が形成されます。この痕跡を表現したものが「リング」です。「フィッシャー」は、打ったところに向かって放射状に生じる線です。よって、この2つの痕跡を見つけることでどこから叩いてその石器を作ったのかということを理解することができるのです。

4. 旧石器時代の生活の変遷

①石器の移り変わり：約4万年前から始まる旧石器時代ですが、実は、前述のとおり、神奈川県は火山に近いこともあり、土層の堆積がとて厚く、それが「時間の物差し」となっています。約2万4千年の間に石器も第7・8図のように変遷していることが分かっています。



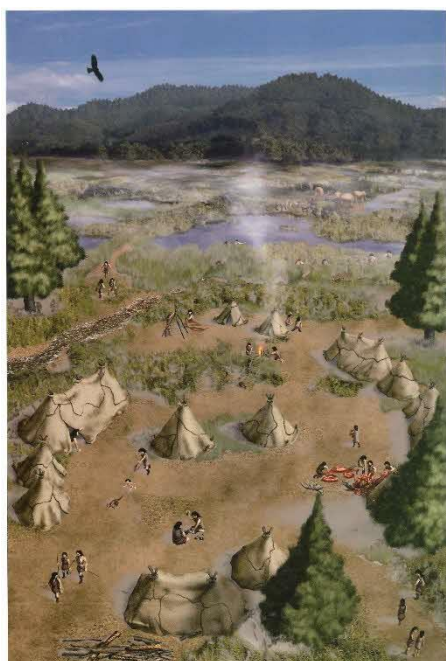
第7図 ローム層の堆積と石器群の変遷

(左：高屋敷飛鳥 2016 『かながわの最初の現代人-旧石器時代のヒトと社会-』神奈川県教育委員会を改変
 右：諏訪 順 2002 「相模野台地旧石器編年と寒冷期の適応課程」『科学』72-2 より転載)

②旧石器時代の生活の変遷：今からおよそ4万年前から1万6千年前までの2万4千年の旧石器時代の間、各時期によりさまざまな生活の痕跡が発見されています。ここでは、神奈川県内で発見された調査事例を見ながら、その内容を確認しましょう。まずは第7図左側の中央にある土層の模式図中「L3」をご覧ください。その横に小さく「AT」という文字があります。これは前述した始良山の噴火で発生した火山灰のことです。この火山灰を含む層位より下層、つまり古い段階の特徴を見てみましょう。

(1) 環状集落と石斧

旧石器時代の初期段階、神奈川県では3万8～6千年前から遺跡が発見されます。この時期、人々は集落を大きな環状に形成した痕跡が各地で確認されています。また、石斧やナイフのように尖った形状ではなく台形の形をした石器が発見されるのもこの時期の特徴です。



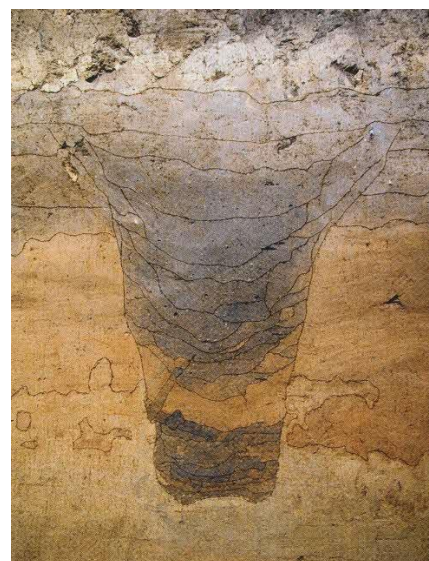
第8図 上林遺跡の環状ブロックから推定されたムラの様子 (佐野市教育委員会 2004)



第9図 津久井城跡馬込地区出土のナイフ形石器・台形様石器・石斧 (高屋敷 2016)

(2) 落とし穴

この時期のもう1つの特徴として、落とし穴の発見があります。これまでのところ、神奈川県内からは横須賀市域からしか発見されていませんが、明確な掘り込みを伴い、縄文時代のように等高線に沿って検出され、当時から計画的に配置されていたことが分かります。



第10図 落とし穴状土坑の断面

(横須賀市教育委員会 2002 『打木原遺跡』より転載)

次に、始良山の噴火より後に確認される時期の事例を見ていきましょう。

(3) 移動生活の証拠

旧石器時代の人々が、移動しながら生活をしてきたことは、石器の接合作業なども類推されてきました。何故なら、石器を製作し、その場でのみ使用したのであれば、必ず、元の原石に近い状態まで復元できるはずですが、実際に出土した石器同士を接合してみると、一部または大部分がその遺跡に残っていないケースが確認できます。何故残っていないのか？それは、次の遺跡、あるいはそこに来る前の遺跡で使用されていたからという想定は容易に出来ると思います。しかし、本県では、その証拠が発見されたのです。

藤沢市用田にある用田鳥居前遺跡とそこから約2kmも北に離れた綾瀬市吉岡の吉岡遺跡群B区から出土した石器が、2万4千年の時を隔ててピタリと接合しました。



第11図 遺跡間接合の遺跡位置(左)と石器の接合状況(右)

(右：かながわ考古学財団 2002 『用田鳥居前遺跡』より転載)

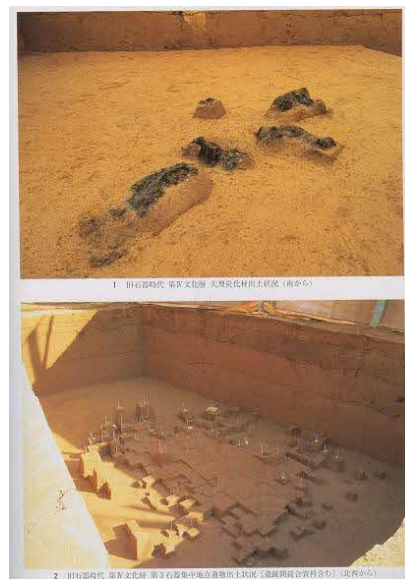
(4) 住居状遺構・炉跡などの発見

日本で旧石器時代の調査を行うと、ほぼ石器や礫のほかには僅かな炭化物や焼土しか出土しません。これは、日本の土壌が酸性が強く木や骨といった有機質の物質を溶かしてしまうからと考えられます。このため、縄文時代以降のように地面を掘りくぼめたような本格的な住居ではなく、おそらくテントのような簡易な住居の跡を発見することはかなり難しいのです。しかし、約2万2千年前後になると、住居状遺構や大形の炉跡が発見されるようになります。



第12図 住居状遺構（左：田名向原遺跡）と炉跡（右：サザランケ遺跡）
（左：丸吉繁一 2020 『相模川 遺跡紀行 ～3万年のものがたり～』
神奈川県教育委員会より転載 右：高屋敷 2016 より転載）

また、藤沢市用田鳥居前遺跡では、大形の炭化材がまとまって出土しており、そのうちの1つは、小さな穴の中に直立した状態で発見されました。これが人為的なものか否かについては明確な答えは出ていませんが、その痕跡を確認できる構造をもち合わせた住居や炉跡が形作られ始めた時期でもあり、当時の人々の何らかの目印のようなものであったかもしれません…。



第13図 大形の炭化物の出土状況（上）と細かな炭化物を取り囲むように石器が出土した状況（下）〔かながわ考古学財団 2002 より転載〕

5. 圏央道の建設により発見された主な旧石器時代遺跡

①津久井城跡馬込地区

3万年以上前の層位から、この時期に特徴的な台形様石器や石斧を伴う石器群が発見されました。石斧は先端のみを磨く局部磨製石斧という特徴的な技術を持ったものも出土しています。石斧の製作には原石を遺跡に持ち込んで実施していることが石器の接合状況からも理解できます。また、遺物の出土状況から、この時期に特徴的な環状集落が形成されていた可能性も考えられます。

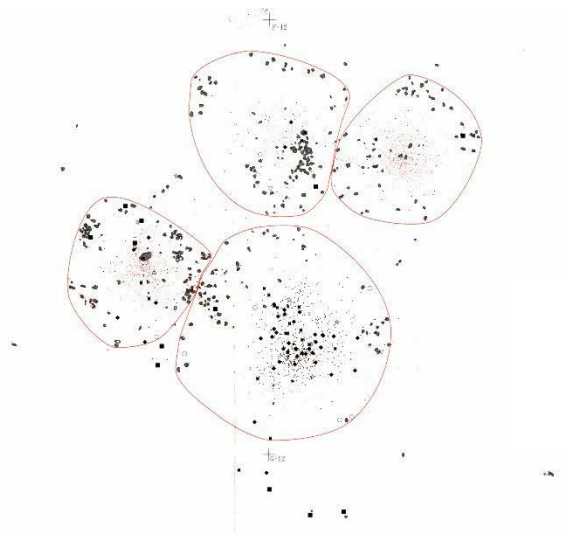


第14図 遺物分布状況（左）と石斧の接合状況（右）

〔畠中俊明 2010「ナイフ形石器文化期のムラ① -環状ブロック群と石斧の生産-」『かながわの旧石器時代遺跡のムラと住まいを探る』 神奈川県考古学会

②小保戸遺跡

始良山の噴火以降の層位から4つの時期が異なる石器群が発見されています。ナイフ形石器の時期が3つ、槍先形尖頭器の時期が1つとなります。中でも特に注目されるのは、約2万4千年ほど前の第3文化層とされた石器群です。この時期に続く田名向原遺跡の住居ほど大きくはありませんが、拳大の礫に囲まれるような状態で石器や炭化物が発見され、小形の簡易な住居跡だったのではないかと考えられる遺構が発見されています。田名向原遺跡のような大型の住居の出現前の段階の人々の生活を考える上で貴重な発見と考えられます。



第15図 遺物分布状況（赤は炭化物）

〔かながわ考古学財団 2013 より転載〕

③小倉原西遺跡

小保戸遺跡の第2文化層と同じナイフ形石器を主体とした石器群が極めて良好な状態で発見されています。住居状遺構が発見された田名向原遺跡と同時期のもので、黒曜石製の石器群と非黒曜石製の石器群に分かれます。黒曜石はほぼ信州（麦草峠・冷山系）のもので、非黒曜石製のものは、接合作業の結果、原石を本遺跡に持ち込み、ナイフ形石器をはじめとしたたくさんの石器製作に取り組んでいたことがよく分かります。



ナイフ形石器(黒曜石)



第16図 出土した数多くのナイフ形石器（上：黒曜石製／下：非黒曜石製）
〔かながわ考古学財団 2014 より転載〕

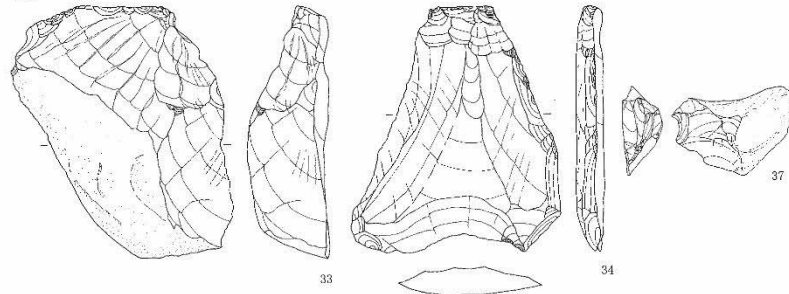
④大保戸遺跡

大保戸遺跡は、約30～40mほどの比高差を持って位置する1段上の段丘面に形成された遺跡です。小保戸遺跡では発見されなかった旧石器時代の最終段階に現れる細石刃石器群が出土しました。

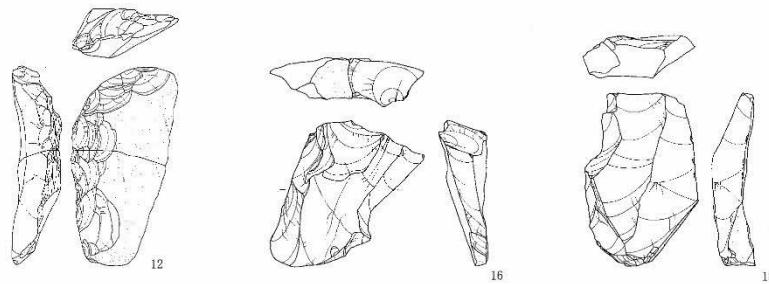
石器は、硬質細粒凝灰岩を中心とした非黒曜石製の石材で構成されています。出土した石器をよく観察すると、1つひとつが大きく、石材の原産地で素材を大きく割り、必要な素材や道具を持ち歩いていたことが良く分かります。

【第1工程】 原石の獲得（本遺跡からの出土事例は無し）

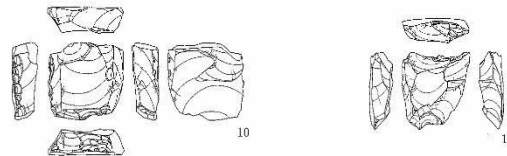
【第2工程】



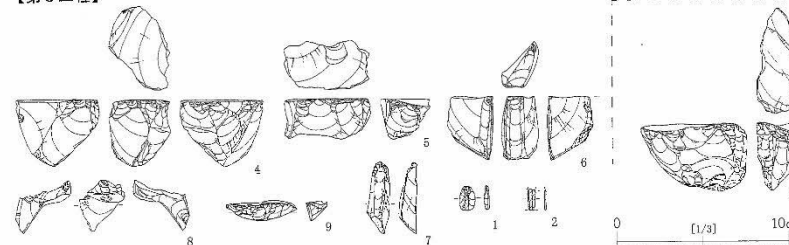
【第3工程】



【第4工程】



【第5工程】

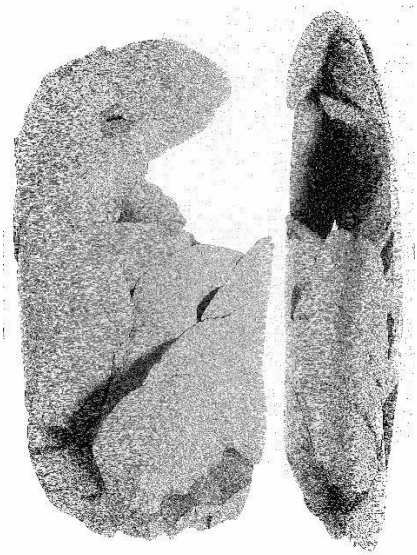


第17図 細石刃石器群の製作工程〔かながわ考古学財団 2013 より転載〕

④当麻遺跡

当麻遺跡は、旧石器時代の住居跡が発見されたことで知られる史跡田名向原遺跡の東側 500～600 ほどに位置しています。

上記の住居跡と同じ時期の石器群（第Ⅲ文化層）、大保戸遺跡とは異なる黒曜石製の細石刃石器群（第Ⅰ文化層）、また、時期的にこの両者の間に位置付けられる槍先形尖頭器を製作した石器群（第Ⅱ文化層）も出土しており、この地に連続的に遺跡が営まれていたことが理解できます。



第 18 図 第Ⅲ文化層出土石器接合状況
〔かながわ考古学財団 2013 より転載〕

おわりに

今回は、「圏央道の調査で発掘された旧石器時代」と題してお話をさせていただきました。あらためて振り返ってみると、これだけの規模の調査を実施した結果、旧石器時代の調査は現在の相模原インターチェンジ付近に数多く存在していたことが分かりました。串川と相模川が合流するこの地は、当時の人々の生活にはきっと好立地だったのでしょう。時期は少しずつ異なっても、石材の利用状況を思い出してみてください。原石に近い状況、あるいは、原石から大形の素材を割り出し、それを各遺跡に持ち込み生活をしていたことが容易に理解できます。長い年月の間に変化していくものは変化し、受け継がれていくべき条件は受け継がれていくということが良く分かったのではないのでしょうか？

また、当麻遺跡のように、大形の住居跡とその近くにある遺跡の意味合いというものも、今後より調査遺跡数がふえてくれば、これまで以上に新たな意義が見えてくるかもしれません。

ただ、遺跡の調査成果は、2度と元に戻せないという状況の中で常に行われています。今後もこれまでも増して、当時の人々の笑顔を思い浮かべながら、慎重に調査を進めていきたいと思えます。また、その成果を皆さんに還元できるように……